



2025 年度
第 34 号

体育市民連帯 ニュースレター

1
ショートトラック代表チ
ームのユン・ジェミョン監督
再び司令塔に復帰…
スケート連盟理事会の議決



2
ボクシング大会の
中学生選手、
意識不明…
「進行不十分」と主張



3
サッカーオールインした
選手たち
引退後に直面した
荒野



4
若い選手たちは
いつから一つの種目に
専念しなければ
ならないのか？



5
運動するすべての学生
自己主導的未来型
体育人材育成
フェスティバル



大韓民国スポーツの

根本的变化を

皆さんと共に

作って行きたいです

体育市民連帯と共に

していただけますか？



*

01 ニュース 2025-09-10

ショートトラック代表チームのユン・ジェミョン監督、再び司令塔に復帰
… スケート連盟理事会の議決

各種の雑音の中で指揮棒を下ろしたユン・ジェミョン監督が再びショートトラック国家代表チームの司令塔に戻ってくる。

大韓スケート競技連盟は 10 日、理事会を開き、ユン・ジェミョン監督の代表チーム復帰を議決したと発表した。

連盟関係者は「理事会議決以後は行政的な手続きだけが残る。ユン監督に結果を通知して復帰受諾すれば、大韓体育会の承認手続きを踏んだ後、再び代表チームに戻ることになる」と説明した。

先立ってユン・ジェミョン監督は昨年 12 月、中国北京で開かれた 2024～2025 国際スケート競技連盟 (ISU) ショートトラックワールドツアー3 次大会期間に公金処理問題で連盟から懲戒を受け代表チーム訓練から除外された。

彼は今年 5 月、忠清北道鎮川の国家代表選手村で始まったショートトラック代表チーム招集練習にも合流できなかった。

これに対しユン監督は連盟の懲戒決定に不服、大韓体育会スポーツ公正委員会再審請求と仮処分申請に出て指導者資格を回復した。

スケート連盟は先月末、キム・ソンテ連盟ショートトラック競技理事兼城南市庁監督を代表チーム臨時総監督に選任したが、キム監督の過去の懲戒の件と関連して上位機関の有権解釈などが必要だという理由で彼を退任措置した。

半年後に開かれる 2026 ミラノ・コルティナダンペッツォ冬季五輪を控えて内紛を経験した韓国ショートトラックはユン監督の復帰でひとまず状況を一段落させた。

ただ、一緒に懲戒を受けた A コーチに対する処分は残っている。

連盟関係者は「A コーチに関してはまだ訴訟が進行中だ。仮処分の引用はあったが、まだ本案まで取り消されたわけではない。これと関連しては時間がさらにかかるものと見られる」と伝えた。

出典：<https://sports.news.nate.com/view/20250910n41213>

02 nate スポーツ 2025-09-08

ボクシング大会の中学生選手、意識不明…
「進行不十分・ゴールデントimeを逃した」と主張

全国ボクシング大会に参加した中等部の選手が試合途中で倒れて意識不明だという情報提供が 8 日、JTBC「事件班長」を通じて報道されました。

情報提供者の選手の両親によりますと、事故は今月 3 日から済州の西帰浦で開かれた第 55 回大統領杯全国市道ボクシング大会で起きました。

大会初日の3日午後4時頃、全羅南道のあるボクシングクラブ所属の中学生が57kg級の競技第2ラウンドが始まるやいなや倒れました。病院に運ばれて手術を受けましたが、現在まで意識を取り戻すことができない状態です。

選手の両親側は試合の進行が不十分で、応急措置もゴールデンタイムを逃したと主張しています。

選手の母親によると、試合中ずっと息子は一方的に攻撃されている様子だったそうです。第1ラウンドが終わって第2ラウンドが始まった時、すでに息子はガードを上げられず、瞳孔が開いたような状態だったそうです。

これに相手選手も気づいたかのように躊躇していましたが、試合は続けられ、結局息子は第2ラウンドが始まって間もなく倒れたと母親は説明しました。

すでに1ラウンドでダウンするなど、2ラウンドをプレーできない状態だということをコーチや審判が知っていたにもかかわらず、試合を強行させたという主張です。

選手の両親は病院移送の過程でも問題があったと指摘しましたが。

119を呼ぶ代わりに競技場にいた私設救急車で選手を病院に運んだが、信号をすべて守りながらゆっくり移送し、病院もまともに見つからずゴールデンタイムを逃したと主張しました。

当時、救急車に乗って一緒に病院に行ったボクシング大会の関係者は、私設の救急車の運転手がサイレンのつけ方も知らなかったし、病院に来てもし入り口が見つからず、ぐるぐる回って時間を遅滞したと主張しました。

結局、競技場から病院まで約30分かかりましたが、医療スタッフは「遅すぎた」と言ったそうです。手術を受けましたが、依然として意識がなく、脳側に酸素供給がうまく行われていない状態だと伝えられました。

このような状況に怒った選手の父親は、8日午前、試合が行われているボクシングリングに上がり、自害を試みたこともあります。命に別状はない状態です。

大会関係者などによりますと、特に今大会初日に病院に搬送された選手が多かったということです。

初日だけで3人が病院に搬送され、2日目にも1~2人が病院に運ばれたということです。

競技の途中でこういうことは珍しくありませんが、それだけ大会がきちんと運営されていないのではないかと心配だと関係者は話していました。

これに関連して大会を主催した大韓ボクシング協会側は「競技中に残念な事故が発生して申し訳ない」としながらも「通常の競技水準であり、競技を中断するほどの特別な事情があるとは考えられなかった」と立場を明らかにしました。

協会の関係者は、第2ラウンドを始める前にコーチが選手に試合を続けられるか尋ねたところ、選手が「プレーする」と言ったので試合が行われたのだと説明しました。

事故発生後、病院に移送される過程でも問題はなかったとし、病院費などは責任を持ってできる部分を尽くすと述べました。

出典：<https://sports.news.nate.com/view/20250908n37574>

サッカーオールインした選手たち、引退後に直面した荒野



「引退してキャディーをするという話、よく聞きますね。 周りにサッカーをしていた人の 90%がキャディーの仕事をしているから。 しかし、私は後でサッカーをやめてもキャディーはやりたくなかったです。 「私はサッカーをしたが、(他の職業の) キャディーをするのが嫌だったんです。 でも……, するようになりました」

6年目のキャディー、金スヨンさん(28)が話した。 スヨンさんは一時、サッカー選手になることを切望していた有望株だった。 そんな彼女がどうやってキャディーとして働くようになったのだろうか。

チーム解体に続く負傷、一瞬にしてサッカー人生が閉ざされる

大学1年生の時までは、スヨンさんはサッカーの有望株としてしっかりと道を歩んでいた。 中・高校の時に年齢別国家代表チームを経て、2015年に驪州大サッカー部に進学した。 監督やチームのスタイルがスヨンさんとよく合い、1年生を終える頃の2015年11月には実力の良い予備新生も多く入ってきた。 通常、高校3年生は大学に入学する前年度の冬から合流して一緒に訓練する。 優秀な後輩たちが入っただけに、冬季トレーニングの時にしっかり磨けば、2年生の時は優勝に挑戦できそうだった。 WKリーグ入団も手に入るかと思われた。

2015年12月のある日、寄宿舍に突然保護者たちが押し寄せた。 一緒に練習していた予備新生の父兄たちだった。 監督が辞めたという知らせを聞いて学校を訪ねてきた。 保護者たちは生徒たちの荷物をまとめて寮から出て行った。 スヨンさんはその時まで監督が辞めたことを知らなかった。 学校と予算配分問題で葛藤が生じて辞めたということの後になって聞いた。 そのように予備新生が大量抜けると、学校には2年生だけが残った。 学校は新しい監督を選任しなかった。 スヨンさんをはじめ何人かの学生は学校を移したが、多くの学生がサッカーをやめなければならなかった。 2016年初め、驪州大学女子サッカー部は解体された。

スヨンさんはそれでも事情がましな方だった。 辞めた監督の推薦で女子サッカー部のある威徳大学に再入学することができた。 しかし、威徳大学サッカー部での生活は順調ではなかった。 望まないポジション変更は最初の試練だった。 「監督が私が背が高いと言って中央守備に立てました。 自分のポジション(攻撃)には、すでに上手な友達もいました。 しかし、私には守備が本当に合わなかったんです。 そのため、うまく走れなくなり、だんだん感覚を失っていったようです」2025年7月7日、全羅南道潭陽のあるカフェで会ったスヨンさんが話した。

中学校の時も無理やりポジションを変更したことがあった。 小学生の時から中学2年生までスヨンさんのポジションはアタッカーだった。 ところが、中学3年生の時、監督がGKにポジション変更を要求した。 当時、GKの席が空いていたが、スヨンさんがただ背が高いという理由からだった。 同じ時期にサッカー部が解体された他の中学校の生徒たちが大量転校してきたが、そのチームには上手な生徒が多かった。 監督はスヨンさんに「お前が(転校してきた子たちと)競争して勝てるか、そのままゴールキーパーしろ」と言った。

スヨンさんがFWポジションを取り戻したのは高校2年生になってからだ。監督を訪ねて泣きながら頼んだ末、再びポジションを変えることができた。やっと取り戻したFWポジションを、驪州大学サッカーチームが解体され、再び失った。大学を移った後、悪材料はポジション変更ではなかった。WKリーグへの支援機会も奪われた。女子サッカー連盟の規定上、大学に入学した場合、2シーズンさえ終わればドラフトが可能だ。スヨンさんは再入学しても、すでに驪州大学で1年を終えたため、もう1学年通えばドラフト支援が可能だった。スヨンさんもそれを望んでいた。ところが監督は、「もう1年やってみて、ドラフト申請をしよう」と言った。

「私は実は、尚武チームに行きたかったんです。ところが、監督が尚武の支援日程を言ってくれなかったんです。当時の尚武では一人だけ選ぶということで知られていましたが、他の選手を送りたかったようです。私が知人を通じて書類受付の知らせを聞いて志願してみようとしたら、監督が次に入れるようにしてあげるから今度は待ってくれと言ってきたんです」

そうして一年を越したが、スヨンさんは翌年にもついにドラフト申請ができなかった。今度は十字靱帯断裂という別の試練が訪れた。「あの時はただ失敗したとしか思いませんでした。やめなければならないという気がしました」

月 200 万ウォンのサッカーコーチ VS 月 500 万ウォンのキャディー

スヨンさんがサッカーをやめて大学に通っていた時、ウィドク大学監督から電話がかかってきた。「小学校のコーチの席があるんだけど、一度行ってみる？」

指導者を夢見たわけでもないが、一生サッカーばかりしてきたスヨンさんがすぐにできることは多くなかった。「できることはサッカーしかありませんでしたから。当面は社会でできることはこれ（サッカー指導）だけだと思っていました」そうしてスヨンさんは2018年から小学校でコーチとして働くことになった。

小学校指導者の道は容易ではなかった。朝7時30分に選手クラスの初練習をして生徒たちを学校に送った後、午後には趣味クラスの生徒たちを教える。その後、学校を終えた選手クラスの子供たちと午後の練習をして夕食を食べる。時によって夕方8～9時まで夜間訓練をすれば日課が終わる。しかし、合宿する学校の女性コーチは仕事が終わらない。寄宿舎で子供たちと共に過ごし「舎監」の役割も果たさなければならなかった。平日には夕方の時間が全くない。土曜日の午前に訓練を終えた後、出て日曜日の午後に帰ってくるのが一週間の中で唯一の休日だった。事実上、24時間待機する構造だ。保護者たちはいつでも連絡し、子供たちが病気になったり寮で用事ができたら皆スヨンさんに頼った。

このように仕事をして学校で受け取る給与は月120万～130万ウォン程度だった。保護者が別途に用意してくれるお金や放課後の趣味でサッカーをする子供たちの課外教習費まで合わせても月200万ウォンをかろうじて越えた。1年半を持ちこたえたスヨンさんは2019年7月頃に学校を辞めた。その直後、高校の時に一緒にサッカーをした友人が「一緒にキャディーの仕事をしてみよう」と言った。スヨンさんは業務教育を受け、2020年からキャディーとして働いている。今は週に3～4日働いて月500万ウォン程度を稼ぐ。「小学校のコーチを辞めてできることがありませんでした。私が勉強をあまりしなかったので、できることがないという気がしました。キャディーはテストのようなものを受けたりしますが、あまり勉強を必要としなかったんです」

ハンギョレ 21 が行った「女子サッカー生涯史」アンケート調査によれば、女子サッカーをして引退した選手 35 人の中で 3 人が「キャディーとして仕事をしている」と答えた。ハンギョレ 21 が直接会った前現職の女子サッカー選手たちと指導者たちは、このアンケート調査で明らかになった数値よりはるかに大きい割合の引退選手がキャディーとして働いているだろうと口をそろえた。キ・ウンギョン元漢陽女子大監督は「周りに引退した選手のうち半分くらいはキャディーの仕事をしているようだ」と話した。

女子選手たちには指導者の門さえ狭い

引退した女子サッカー選手たちがキャディーなど特定職業に集まる背景と構造は何か。始まりは学生時代の足りない進路教育にある。2024 年、韓国レジャーサイエンス学会誌に掲載された「女子サッカー選手の引退進路実態および改善方案研究」（ソンミンジ）を見ると、「選手たちは運動以外の他のことに対する経験が不足し、進路選択において困難が現れる」とし、「すでに大韓体育会進路支援センターで進路相談や進路教育などが行われているが、このようなプログラムの存在自体を知らず、現行の教育プログラムを通じた進路転換成功率が低いという研究もある」と指摘した。

スポーツ選手たちに進路探索の機会が足りないのは、女子サッカーだけの問題ではない。そのため、女子サッカー選手であれ、男子サッカー選手であれ、引退後最も簡単に接するのが指導者の道だ。問題は、女子サッカー選手はそれさえも制限されるという点だ。国内の小学校から WK リーグまでの女子サッカーチーム数は 64 個で、男子チーム（1069 個）の 10 分の 1 にも満たないが、女子サッカーチームの中でも男性が指導者として働く場合が多い。

ハンギョレ 21 が第 24 回全国女子サッカー選手権大会に参加した 62 チームを分析した結果、監督が空席の 1 チームを除いた 61 チームのうち 33 チームの監督が男性だった。反面、男子小学校～大学サッカー部とプロチームに女性監督は一人もいない。キム・テヒ前監督が 2019 年水原 FC U12 チームに監督として赴任した事例が唯一だ。キ・ウンギョン前監督は「男子チームにいた指導者たちが女子の方に多く移ってくる」として「女子チームには女子指導者がたくさんいなければならないが、男子指導者たちが皆占めているので入ることができない」と話した。

引退した女子サッカー選手が指導者の道に入っても、環境は容易ではない。彼女らは「コーチ」という肩書きで呼ばれるが、実際にやっていることは寮で選手たちと一緒に常駐しながら彼女らを管理する「保母」の役割に近いとハンギョレ 21 が会った前現職指導者たちは口をそろえて話した。「365 日、子供たちと一緒に縛られています。とても大変なんです。それで女子サッカー選手たちがキャディにたくさん抜けるんです。「どうせ同じように大変なら、一番（準備期間なしに）早くできて、お金をたくさん稼げるキャディーをするんです。引退した弟子たちが私にもキャディーをしてみろと提案するほどです」とキ・ウンギョン前監督が話した。

そのため、多くの選手が引退後、指導者の道に飛び込んだ後、別の道を探す。大学時代にサッカーをやめた後、しばらくコーチとして働いたムン・チェリムさん（25）は現在、美容師として働いている。新しい仕事に挑戦してみたかったチェリム氏は、学生時代に友人の髪を整えてあげた記憶を生かして美容の仕事を始めたが、周辺にキャディーに渡った同僚が多いと打ち明けた。「もともとはサッカーを教える仕事をしたいという考えが全くなかったのですが、（引退後）指導者の方に行かない限り、やることはありませんでした」

女子サッカー指導者よりキャディーの仕事をすれば、はるかに高い給料をもらえるという点も重要な要因だ。世宗スポーツと昌寧 WFC など選手生活をし、2021 年に引退したチャン・ミンヨンさん（32）も「私もキャディーの仕事を準備した」とし「運動するとどうしても支出が多いが、キャディーは給与が多く保障されることがあるので、そちらにたくさん抜けるようだ」と話した。スヨンさんは「周りにキャディーの仕事をしている友人や先輩たちを見ると辞めたがる人がいない」とし、自らも自分の仕事に満足していると話した。

しかし、スヨンさんに女子サッカーコーチとキャディーの仕事の年俸が似ているなら、何をしたいかと聞いたら、このような返事が返ってきた。「絶対にコーチとして働いています。」

「サッカーしかできないのに、他のことをしなければならぬのが辛かった」

スヨンさんは大学チームが解散したことをきっかけに色々な事件が重なってサッカーを辞めたケースだが、選手たちが最も多くサッカーを辞める理由は負傷だ。ハンギョレ 21 が行ったアンケート調査によれば、サッカーを辞めたり引退した理由を尋ねる言葉に「負傷」と答えた人が 39%で最も多かった。負傷でサッカーを辞める選手の場合、大半が他の進路について考えたり、引退後を準備する時間がなかったため、さらに社会適応に困難を覚える。大学時代、3 度目の十字靭帯断裂でサッカーをやめなければならなかったチョン・スアさん（24）もそうだった。

スアさんはサッカーが上手な方だった。ソルボン中学校と烏山情報高校を出て、サッカーで有名な蔚山科学大学に進学した。苦勞して入学した大学だったが、学校生活が順調ではなかった。当時、監督と仲が良くなかったためだ。「施設やインフラはとても整っていて、サッカーをするには良かったところなんです。ところが（監督が）言葉も荒くて、そういうのが耐えられなかったんです」7 月 3 日、京畿道広州市のあるカフェで会ったスアさんが話した。

悩みを繰り返していたスアさんは、高校の時に一緒に運動していた友人が多数在学中の京畿道広州市の東遠大学に移った。学校を移してからしばらくの間、すべてが良かった。問題は他のところで起こった。2024 年 6 月、高校の時に 2 回負傷した十字靭帯が再び切れたのだ。WK リーグが切実だったので、何とかもっとやってみようとしたが、親から医者まで皆止めた。同じ部位を 3 度も怪我して手術も一度にできないと言った。負傷直後、1 次手術で骨盤骨を移植した後、6 ヶ月後に 2 次手術をしなければならなかった。「1 回目の手術の直後まではずっと耐えてみようと思ったんですが、どうしても駄目でした。いくら好きでも、一生きちんと歩けるようになるためにはやめなければなりませんでした」

いざサッカーをやめることにして家にだけいるのはとても大変だったとスアさんは振り返った。それで始めたのがアルバイトだった。クーパン（訳注：韓国を拠点とするアジア最大級の e コマース企業）の配達から食堂、サッカー場のチケット売り場の仕事など手当たり次第に仕事をした。「サッカーのバウンダリーの中にいる人ではなく、外でたくさんの人に会っているうちに、こんな気がしました。サッカー以外にも世界は広くてできることが多いな…、その時、心の整理をしました。2 回目の手術の時は、むしろ心も楽でした」

スアさんは特にサービス職がよく合った。そうしているうちに思ったのが美容だった。幼い頃から飾るのが好きだった彼女は、2 回目の手術後、美容学校に登録した。現在、美容師国家資格試験を準備している。スアさんは比較的短い時間の間に多様なアルバイトを経験しながら他の進路を決めたが、皆が簡単にすぐに決められるわけではない。

ハンギョレ 21 が行った女子サッカー選手の生涯史アンケート調査で引退した 35 人の中で「引退以後に職業がなかったり一つの職業だけを持った」と答えた人は 12 人だったが、「2 つ以上の職業を持った」と答えた人は 23 人だった。引退以後、第 2 の人生を準備する過程で最も難しかった点を尋ねる言葉には「サッカーしかできないのに他に何かをしなければならないということ」とか「サッカー以外にできることがないという考え」「私が何が好きで望むのか分からないということ」等の返事が多かった。

「サッカーしか考えられない競走馬」として育てられた選手たち

チームの解体であれ負傷であれ、突然社会に追い込まれた時の途方に暮れる気持ちは、国家代表を経験して WK リーグ（訳注：2009 年に始まった韓国女子サッカーリーグ）でプレーした選手たちにも同じように感じられた。2010 年 U17 女子ワールドカップ（W 杯）優勝メンバーでドラフト 1 位に指名され、国民体育振興公団（現ファクション KSP0）所属で WK リーグで活躍したオ・ダヘ（32）さんは 2019 年 26 歳で引退した。25 年 3 月 12 日、ソウル冠岳区のあるカフェで会った彼女は、「WK リーグで長い間プレーしたが、引退後、何をすべきかよく分からなかった」と話した。すべての分野が同じだが、専門選手生活自体が、押せば職業が飛び出す「鬼棒（訳注：おとぎ話で心の良い弟は鬼のバットで大金持ちになった）」であるわけではない。一方ではサッカー以外の仕事をしてみたかった。「サッカーを比較的早くやめた理由の一つは、青少年の時から成人になるまでサッカー以外にはやったことがないということも大きかったです。サッカーばかりしていて、もっと遅い年齢で引退すると、その後の人生のビジョンを見つけるのがもっと難しい」

ダヘさんは引退後、知人の会社に入社して 3 年間事務職として働いた。働きながらピラティスの資格を取って会社は辞めた。「お金の苦味」も味わった。チョンセ貸出の利子は上がり続けているが、ピラティス講師で稼ぐお金には限界があった。2023 年に実の兄がした「紅ズワイガニ商売」の提案をぱっと受けたのは「お金をよく稼げるか」という考えからだった。しかし「サッカー選手出身の紅ズワイガニ商売」という妙案が生じ、売上が急に増えるわけではない。6 ヶ月で再びソウルに戻った。そして今は再びサッカーコーチだ。

ダヘさんを含め引退した彼女らは専門サッカー選手として生活しながら小・中・高等学校に通う間にはサッカー以外に他の進路を考えることが難しい雰囲気だと話した。「いろんなことを経験しながら私が得意なことは何だろう？ 私のスタイルは何？ こういうことを知って探しながら育つのが正しいのですが、韓国でサッカーをはじめ、あるスポーツをすると、まさにそのスポーツだけを見て生きていくことになります。私の場合は「サッカーしか考えられない競走馬」に育てられたのです。運動選手たちは早い年齢でスポーツをやめることになるが、「引退準備」は引退してから始まります」とダヘさんが言った。

スアさんも「幼い頃はただ無条件にサッカーに対する考えしかなかったし、辞める考えさえ全くなかった」とし「無条件にサッカーで成功するという考えしかなかったので、大学に行く前まではサッカーをやめたら何をしようかという考えを一度もしたことがない」と話した。

ダヘさんは日本のサッカー選手の話聞いて「それが可能なんだ」と驚いたと話した。「日本は（サッカーが）サブキャッチだそうです。完全な 1 軍でない以上は、自分のやるべきことを準備しているんです。それが準備できるから、彼女らは急に辞めても何かやることがあるんです。ただそういうのがちょっと驚きですね。まったくそんな世界を知らなかったのですが、ある意味、私はガスライティングを受けて生きてきたような気がします」

実際、ハンギョレ 21 が日本で会った高校サッカー部の学生の中でプロ選手を準備する学生は 10%にもならなかった。残りは警察官や救助犬訓練士などすでに多様な将来希望があり、サッカー部に参加しながらも未来を準備していた。

「日本の高等学校女子サッカー589 チーム、その秘密を求めて」記事参照

https://h21.hani.co.kr/arti/culture/culture_general/57883.html

「みんなプロになるんじゃないの… サッカーをやめたら絶対にコーチかキャディー」
スヨンさんは早くキャディーを選んだのがむしろ良かったと言う。「サッカーをする学生たちが皆プロになるわけではないでしょう。ご飯だけ食べてサッカーをするとしても、みんななるわけではないから。私は WK リーグに行かずにそのまま辞めてよかったと思います。今（WK リーグで）プレーしている友達も見れば、とにかくいつかはサッカーをやめなければならないじゃないですか。それでは確かにやめてすることがないです。必ずコーチをするかキャディーをするでしょう。すでに私がすべて経験したことじゃないですか。だから目的地は同じなのに、誰がもっと早く出て社会生活をするかの違いです」
サッカー「だけ」するのではなく、サッカー「も」しながらいろんな経験ができる環境を作ることはできないだろうか。

出典：https://h21.hani.co.kr/arti/society/society_general/57922.html

04 ティーストーリー 2025. 9. 12

若い選手たちはいつから一つの種目に専念しなければならないのか？

アスレチック・ラスティン・ドッド記者のコラム「若い選手たちはいつ一つの種目に専念すべきだろうか？ この話が役に立つだろう」です。

<https://www.nytimes.com/athletic/6616450/2025/09/11/youth-sports-specialization-parents-young-athletes/>



13 歳の時、ヤニック・シンナーは、リカルド・ピアティという有名なイタリアテニスコーチと練習するために家を出た。彼がひたすらテニスだけに集中したのは初めてで、大きな夢を抱いていたが、現実的な目標を立てた。

「いつか世界 100 位内に入ることができれば一番幸せだろう」とシンナーは回想した。彼は確率を知っていたし、このスポーツがどれだけの費用がかかるかも知っていた。それで両親に 23 歳か 24 歳になった時、世界 200 位内に入らなければテニスをやめると言った。現在のシンナーの位置を見ると-世界 2 位、グランドスラム 4 回優勝、依然として 24 歳-彼が自分の潜在力を過小評価していたようだ。しかし、シンナーは一般的なテニスの成長過程を経なかった。ドイツ語を使うナムチロール州で生まれた彼は、幼い頃スキー選手として活動し、他のスポーツも一緒にした。ピアティ・コーチと一緒に仕事をするまでは、テニスは彼の人生の一部に過ぎなかった。

テニスはその形態と伝統上、天才のスポーツだ。最高の選手はほとんどが幼い頃ラケットを握り、10歳になる前にアカデミーコーチを訪れ、数年間ジュニアサーキットで磨きをかけている。この成功経路は長い間テニスを青少年スポーツ専門化論争の中心に置き、選手と親が直面する質問を提起した：若い選手を育成する最も良い方法は何か？ いつが専門化するのに最適な時期なのか？

研究者たちは、早期専門化（12歳以前に年中訓練するという定義）が負傷の危険を高め、技術開発を阻害する恐れがあると話す。また、創意性と問題解決能力を害する恐れもある。

2019年に整形外科スポーツ医学ジャーナルに発表された調査によると、米国1部リーグの選手の約45%が16歳まで様々なスポーツをしたと推定される。しかし、これは半分以上が16歳以前に専門化したという意味であり、このテーマに対する数十年の研究にもかかわらず、専門家たちはこの数値が依然として堅固だと話す。

「青少年スポーツのこのような文化的現象を変えることは、実際には非常に難しいです」とエモリー大学のスポーツ医学専門医であるニール・ジャヤンティ博士は語った。

ジャヤンティはこの20年間、若い選手たちの発達を研究してきた。今まで幼い頃から一つの種目だけをするのが、複数の種目をするより良いという研究は一つもないと彼は言う。代わりに研究者たちはサンプリングの利点-多様なスポーツを通じて多様な技術を習得すること-を強調する。

もちろん運動で成功に単一の道はなく、すべてのスポーツごとに固有の要求事項がある。ほとんどのゴルファーは非常に若い年齢でこのスポーツを始める反面、ほとんどの最高NFLクォーターバックは高校で色々なスポーツをした。

マイケル・フェルプスは最初はユースサッカーをやっていたが、母親が水泳の専門化を考えてみると励まし、彼は歴代最多のメダルを獲得したオリンピック選手になった。パトリック・マホームズは大学でしばらく野球チームでプレーしたが、30歳以前にMVPとスーパーボウル3回優勝クォーターバックになった。

世界中の何百万人もの子供たちに対する勧告を提示する際、ジャヤンティは他のことも信じている。スキーがおそらくシンナーをより良いテニス選手にしたと。

しかし、親が考慮しなければならないことははるかに多い。

「12歳の子供をプロ野球選手に育てるのか、それとも立派な人に育てるのか」

ジャヤンティは偶然スポーツ専門化の問題を発見した。

整形外科医として訓練を受けた彼は、2000年代半ば、青少年テニス選手たちの負傷を調査する途中、同僚たちとともに興味深い関連性を発見した。12歳から18歳のエリートテニス選手530人を対象にした研究で、約70%が10歳頃にテニスを専門化した。このグループは専門化していない選手より負傷する確率が1.5倍高かった。

ジャヤンティはデータについて過度に確信していなかったが、2009年に発表されたこの論文はスポーツ専門化と負傷危険を関連させた最初の研究だった。また、青少年テニスの圧迫を詳しく扱ったアンドレ・アガシの回顧録「オープン」が出版された年でもあった。

この研究は、専門化と負傷との関連性を確認するさらなる研究を触発した。また、すべての青少年スポーツで増加する専門化に対する反発につながり、このような傾向に対抗する事例に注目させた。多様な幼い頃、スポーツで大きく助けられた選手たちの事例を探すのは難しくない。

ニューヨーク・ヤンキースのスター、アーロン・ジャッジが数回の MVP を受賞する前、彼はカリフォルニアで3種目の選手であり、高校の間ずっとバスケットボールとサッカーを続けた。マホームズの子供時代のほとんどの間、サッカーは彼が3番目に好きなスポーツだった。MLB 投手パット・マホームズの息子であるパトリックは野球で優れ、友達とバスケットボールコートで楽しみを見つけた。彼は高校3年生の中盤まで主力のクォーターバックにならなかった。

サッカーにのめり込んだ時、彼のサンプリング経験がプレーに影響を及ぼした。バスケットボールのおかげで、彼は完璧な空間認識能力を備えている。野球のおかげで、ぎこちない姿勢と非習慣的な腕の角度から投げる技術を身につけた。

「それがショートプレーです」とマホームズは言ったことがある。

研究者たちにとってマホームズの話は彼らが「適応性」と呼ぶこと、クロストレーニング概念の変形を示す明確な事例だ。

「技術の転移があります」とジャヤンティは言った。「毎回同じ身体部位に過負荷をかけません。そして、面白さ、問題解決、多様性の要素もあります」

科学は他の長所も明らかにする。エモリースポーツ成果および研究センターのディレクターであるグレゴリー・マイヤーは、神経根訓練と生体力学を研究してきた。若い選手が若い年齢で色々なスポーツをサンプリングする時、これは単純に多様な筋肉を活用して育てるのではない。認知的利点もある。

多様な技術を習得する過程は、マイヤーによれば、身体の適応性と彼が「神経効率性」という脳の能力を作るといふ。一つの結果:エモリーで実施した仮想現実研究によると、多種目の選手たちがより良い運動制御力と着地技術を持っていることが分かった。

「若い選手が若い頃に良いスポーツサンプリングを受ける前に専門化すれば、多様な必須運動技術を開発することはできません」とマイヤーは言った。

ところが、最初の研究発表後、15年間興味深い発展があった。負傷の危険との関連性とスポーツ界の注目される事例にもかかわらず、全体的な数値は変わらなかった。子供たちは依然として同じ割合でスポーツを専門化している。

慎重な専門化の道

ジャヤンティとマイヤーはスポーツ専門化を定義する簡単な枠組みを使用し、3つの質問を投げかける: 選手が年間8ヶ月以上同じスポーツのために訓練するのか?

選手が一つの「主要スポーツ」を選ぶのか?

選手が一つのスポーツに集中するために他のすべてのスポーツをやめたのか?

3つすべてに「はい」と答える選手は「高い」専門化で、2つに該当する選手は「普通」と見なされる。

残りは「低い」専門化と思われる。研究者たちは各グループが大体米国の若い選手人口の3分の1ずつを占めると推定するが、これはジャヤンティが研究を始めた時と同じ比率だ。

もし数値が変わらないのなら、マイヤーには別のアイデアがあった。おそらく慎重に専門化する方法があるだろう。

「これができない」または「これに耐えられない」と教条的に言うてはいけません」とマイヤーは言った。「私たちがすべきことは、専門化する子供たちがいるなら、どのように彼らを助けるかということです。」

初期の研究から数年間、研究者たちはコーチと親のためのガイドラインを開発した。若い選手が単一スポーツを自分の年齢より多くの時間（1週当たり）で訓練しないことを勧める。チームスポーツの場合、ジャヤンティは少女たちが少なくとも11歳から13歳まで、少年たちは少なくとも13歳から15歳まで専門化を待たなければならないと助言し、これは身体が骨格的に成熟するように許容するためだ。

スポーツによっても違う。サッカーやバスケットボールのような純粋な力と速度を土台にする活動の場合、16歳から18歳頃に専門化しても該当スポーツの頂上に到達することができる。テニス、ゴルフ、野球のように、より多くの技術的熟練を要求するスポーツでは、青少年中期に専門化するのが合理的かもしれない。

例外もある：体操を見よう。選手が完全に成熟する前に競争する技術的スポーツだ。早期専門化の場合、マイヤーは他のスポーツと動作パターンを模倣する訓練方法を採用して負傷の危険を減らすことが重要だと話す。

研究過程のある時点で、ジャヤンティは青少年スポーツの真の意味についても考え始めた。楽しく過ごし、人生の教訓を学ぶためか？公衆衛生の問題か？そして、プロや大学スポーツをする現実的な機会がないが、チームに入ることに内在した自信の向上から助けられる子供たちはどうだろうか？それを行うために専門化された訓練が必要であれば？

「目標が町で最高の12歳になることなら」とジャヤンティは言った。「6歳から始めて、一生懸命練習して、最高の12歳にきなさい。そうすれば、実際に合理的な機会を持つことになる」

ジャヤンティはこれを「短期選手育成」と呼ぶ。長期的には選手が最大潜在力に到達するのに役に立たない可能性があり、固有の負傷の危険が伴う。でも短期的には？

「実際に効果があります」とジャヤンティは言った。「残念なことに」

多様性の精神的強さ

シンナーがスキーが自分のテニスにどのような影響を与えたかを振り返ると、彼はバランスについて言及したが、これはコートでの感覚的な身体制御と動きで現れる。身長6フィート3インチの筋肉質な体格にもかかわらず、彼はツアーで最高の動きを見せる選手の一人だ。

しかし、彼は本当の利点は失敗に対処する方法を学んだことだと信じている。スキーで一度ミスすると、試合に勝てなかった。テニスでは数多くのミスをして反撃を続けることができる。

「スキーを通じて全く違う精神力を持つようになります」とシンナーは言った。

世界7位の女子テニス選手、ジェシカ・ペグラーは多様なスポーツをしながら育った。チームソフトボールをやってみて、サッカーをして、7歳から10歳の間にゴルフレッスンを受けた。11歳でテニスだけに集中し始めた。

ペグラーは、初期サンプリングが自分の目と手の協応力の土台を作ったと信じている。しかし、自分の遅い開花経歴を考えれば-25歳で初のWTAタイトル、30歳で初のグランドスラム決勝-おそらく専門化をさらに遅らせてもよかっただろう。それでもジュニアで優秀しなければならないというプレッシャーは明らかだった。

「おそらくあと何年かやっても大きな影響はなかったと思います」とペグラーは言った。「私の経歴を見ると、後になって本当に上手になり始めたんです。しかし、12、13歳くらいになるとトーナメントに参加し、ランキングを積むことにある程度専念すべきだと思います」

ペグラの道は専門化質問の見過ごされた側面を示している。単に幼い子供たちがもっと早く専門化するだけではない。幼い頃から彼らのほとんどすべてのスポーツ経験が組織化された環境で行われるということだ。

「子供たちが思いっきり走り回る文化が消えてしまいました」とジャヤンティは言った。

以前は子供たちが主に自由に、大人たちの干渉なしにスポーツを楽しんだ。今は正反対だ。米国の子供たちはただ遊びでするスポーツより体系的に組まれたスポーツ活動に2倍も多くの時間を費やしている。研究結果、自由に走り回る時間が増えるほど、負傷の危険が大幅に減ることが分かった。また、より良い運動技術と向上した創造性を開発するのに役立つ。

多くの親の間には子供が取り残されるのではないかという恐怖が残っている。

元NFLタイトエンドであるグレッグ・オルソンが2021年に引退した時、彼は若い選手たちと彼らの両親に焦点を合わせたプラットフォームである「Youth Inc.」を始めた。彼の経験が関心を引き起こした-彼は社会的圧迫と企業化された文化に囲まれた、完全に異なるスポーツ環境に入っている3人の10代前半の子供を持っている。

「子供たちが感じていることは」とオルソンは最近ディアスレチックのエリス・デヴリンに言った。「この12ヵ月間、そのスポーツだけをしてきた子供たちと競争するために、毎シーズン新しいスポーツに飛び込むのは非常に難しいということです。」

オルソンは、この考え方が重要な点を見逃していると信じている:才能のある選手が成長するための最良の方法の一つは、何かをうまくできないことだ。すべてのスポーツは、明確な文化、技術、新しい精神的挑戦を提供する。

スターサッカー選手が冬にバスケットボールチームで補助プレーヤーとして過ごす時、彼は身体的に挑戦されると同時にチームワークに対する必須的な観点を得ることができる。単なる逆境ではなく、問題を解決する機会だ。

それぞれのユニークなスポーツは、彼らが学び、失敗し、成功するための非常に異なる環境を提供します」とオルソンは言いました。

多くの研究者が心配するのは、さまざまなスポーツを経験したことのない子供たちが、いざ自分に最も合う種目を逃す可能性があるという点だ。本当に優れた選手はほとんど思春期が過ぎてから頭角を現す。あまりにも早く一つの種目だけにこだわって自由に走り回る時間が足りなくなり、マイヤーがさらに憂慮する問題が生じた。まさにスポーツをやめる子供が増えているということだ。

「私にとって早くスポーツをやめることが最大の危険要素です。なぜなら、私たちは今、生涯にわたって健康的な運動とスポーツを楽しむ機会を失っているからです」とマイヤーは語った。

WTAを諮問してエモリーのテニス医学プログラムを率いるジャヤンティに、シンナーと他の選手たちの話は運動発達に対する彼の観点を形成した。テニスのようなスポーツでは極度の練習量が必要だ。現実的に、これはより早い専門化につながる。しかし、幼い頃に多様な技術を身につけた選手が、そのような負担に耐えるのに最もよく準備されているかもしれない。

「より良い方法は、まず運動選手としての基本技をしっかりと固めることだと思います」とジャヤンティは言った。「もう少し年を取って骨と筋肉が十分に伸びてから、高強度のトレーニングに耐えることができます。その時、本格的に強度を上げればいいのです」

ジャヤンティによると、いつも人とは違う道を歩く選手がいるものだ。もし彼が米国全体の子供たちに助言するならば、急がずに色々なスポーツを経験して多様な技術を身につけ、何よりも楽しく楽しむことに集中しろと言うだろう。

「しかし、何度も何度も早く専門化する子供たちもいるでしょう」とジャヤンティは言った。「そのうちの一部は本当に大成功するでしょう。彼らは例外的なケースですから」

出典：

<https://nymetsandknicks.tistory.com/entry/%EC%96%B4%EB%A6%B0-%EC%84%A0%EC%88%98%EB%93%A4%EC%9D%80-%EC%96%B8%EC%A0%9C%EB%B6%80%ED%84%B0-%ED%95%9C-%EC%A2%85%EB%AA%A9%EC%97%90-%EC%A0%84%EB%85%90%ED%95%B4%EC%95%BC-%ED%95%A0%EA%B9%8C>

05 慶南日報 2025-09-26

「運動するすべての学生、自己主導的未来型体育人材育成」フェスティバル



慶尚南道教育庁(教育監パク・ジョンフン)は「運動するすべての学生、自己主導的未来型体育人材育成」を目標に第19回教育監杯学校スポーツクラブ大会を5日から7日まで3日間開催する。

今回の大会には、1学期の教育支援庁単位リーグを通じて選抜された初等学校185校3470人、中学校158校3478人、高校107校241人など、計789チーム、9189人の生徒が参加した。京畿道は道内の各地域で26種目に分散開催され、学生たちが多様な舞台で技量を披露する予定だ。

行事は単純な勝負の場を越え、学生たちが互いに疎通し和合し、公正・協同・挑戦のスポーツ価値を体験する祭りの場につながる予定だ。

特に優勝したクラブは10月～11月に開かれる全国学校スポーツクラブ祝典に慶南代表として出場し技量を披露することになる。

パク・ジョンフン教育監は「運動する学生が幸せだという教育哲学を土台に学校スポーツクラブ運営をより積極的に支援する」とし、「大会参加のために献身した学校関係者と支援を惜しまない慶尚南道体育会に深く感謝申し上げる。また、激しい競争の中でも相手を配慮して手を差し伸べる真のスポーツマンシップを見せてくれた学生たちが誇らしい」と話した。慶尚南道教育庁提供

出典：<https://www.gnnews.co.kr/news/articleView.html?idxno=618710>

体育市民連帯オンライン 定期後援案内

万人が楽しむスポーツ世界、体育市民連帯が共に作ります。
私達連帯の活動に積極的に賛同していただくことを願います。

私たち体育市民連帯は体育人の権益保護と
福祉実現のために努力しています。
皆さんの小さな心づかいがより良い世界のための
体育市民連帯活動に強固な土台となります。
体育市民連帯会員として力になろうと
される方は下の口座に後援お願いします。

国民銀行 086601-04-095940

口座名義：体育市民連帯

オンライン定期後援は下のリンクを通じてホームページからできます。

多くの関心をお願いします。

体育市民連帯 ソウル市 瑞草区 瑞草洞 孝寧路 230 スンジョンビル 407 号

Tel : 02-2279-8999、E-mail : sports-cm@hanmail.net ホームページ : <http://www.sportscm.org/>

日本語訳：佐藤好行 新日本スポーツ連盟 国際活動局 韓国担当 jr1fep@gmail.com

週刊ニュースレターバックナンバー（資料室） <http://www.yg.jpn.org/sportscm/index.html>